

復刻版

# 海の外

編集

森武磨 (一橋大学名誉教授)

全3回配本・全7巻・別巻1

## ブラジル移民から満洲移民へ

大正期から昭和戦前期日本の海外移住の実態、現地社会と日本人とのかかわり、そして国内の様子を克明に記した稀有な雑誌『海の外』。「移民先進県」長野のみならず、日本における「移民」の原点を伝える幻の資料をついに復刻！

推 薦 和田敦彦 名村優子 齊藤俊江

刊行によせて——永田翼 木村快

底本——『海の外』第一号〜第二五四号(一部欠)

一九二二年四月〜一九四三年六月

『信濃開拓時報』創刊号〜第一一号

一九四四年七月〜一九四五年五月



▲『海の外』第91号、1930年1月、表紙

▶神戸を起航する移民船の様子(在伯同胞活動写真帳)一九三八年。



アリアンサの様子(2003年撮影。『創設八十年—アリアンサ移住地』2012年)

不二出版

『海の外』は一九二二年四月に創刊された、長野県の信濃海外協会の機関紙である。

一九一〇年代から海外移民の推進のために、各府県で海外協会が設立されたが、中でも信濃海外協会が設立された長野県は、最も多くの満洲移民を送出した県として有名であろう。長野県は一九二〇年代から本格的に移民政策を展開しており、中でもブラジルへの移民に熱を注ぎ、他県の範となるほどのものであった。

そもそもこの時期に移民熱が全国的に高まっていた背景には、増え続ける人口を国内では養えないという困窮があったと考えられ、その「解決」のために活動した海外協会の分析は重要であろう。しかしながらこれまで各府県海外協会の活動はほとんど注目されてこなかった。その要因の一つには、各協会の機関紙の残存状況が悪く、総覧が困難であったことがあげられるのではないかと。

そのようななかで『海の外』は、廃刊となる一九四三年五月までに二五三号が毎月刊行され、さらに一九四四年七月には後継誌『信濃開拓時報』（長野県開拓協会発行）が創刊、終戦間際の一九四五年五月まで一一号が刊行されている。本復刻版には、現存が確認できる二〇七号（『海の外』一九六号、『信濃開拓時報』一一号）を収録している。

その紙面には、移民奨励の様子のみならず、移住地の経営状況、現地からの通信が掲載され、また地域もブラジルや満洲に限定されず、排日運動下のアメリカや東南アジアといった、広範な地域に関する記事が掲載されている。

さらに別巻として森武磨『満洲移民とブラジル移民—信濃海外協会「海の外」を対象として—附「海の外」総目次・索引』を刊行。『海の外』、『信濃開拓時報』の特徴、関わった機関や人びと、そして今日的意義について明らかにしながら、なぜ長野県の移民送出は盛んでありつづけたのか、その経済的・社会的・政治的背景を解明、『海の外』活用の格好の手引きとなるだろう。

海外から日本への移民が増え両者の間の摩擦も増えるなかで、過去逆の立場にあった日本人が、どのような経験や思いを経て生き抜いていたのかを考えることは非常に重要なことであろう。そのための基礎資料として本資料集を供したい。

不二出版編集部

本書の特徴

◎一九二二年から一九四五年まで継続的に刊行された『海の外』『信濃開拓時報』を復刻。日本の国際的立場が揺れ動いた時期の移民奨励やその姿を活写。

◎ブラジル・満洲のみならず、排日運動下のアメリカや東南アジアといった、広範な地域に関する記事が掲載。

◎日本の移民政策の変遷、移民が盛んであった背景、そして『海の外』の今日的意義を明らかにする、森武磨の別巻『満洲移民とブラジル移民—信濃海外協会「海の外」を対象として—附「海の外」総目次・索引』を附す（第二回配本時、分売可）。



▲アリアンサの位置。サンパウロ市から内陸に600km超の奥地に建設された（『日本力行会百年の航跡』1997年）。

義勇軍幹部内定

(十二月十二日現在)

二十一年度出陣の本義勇軍は日下滿洲地方事務所教育課が三第一隊となり三回中隊編成の大成功の活躍を続けながらこの義勇軍編成についても着々成果を挙げ、あり之奉内定を目標として、義勇軍編成中であるが、十二月十二日現在在隊に於て内定せる者は左記六氏である。

- 第一中隊 中隊長 菅野 正三郎 下中隊長 菅野 正三郎
- 第二中隊 中隊長 菅野 正三郎 下中隊長 菅野 正三郎
- 第三中隊 中隊長 菅野 正三郎 下中隊長 菅野 正三郎
- 第四中隊 中隊長 菅野 正三郎 下中隊長 菅野 正三郎
- 第五中隊 中隊長 菅野 正三郎 下中隊長 菅野 正三郎
- 第六中隊 中隊長 菅野 正三郎 下中隊長 菅野 正三郎

本年渡滿者三千九百名

開拓事業別給付金の激増の数字

本年一月以降十一月十五日迄の間に於ける開拓員及家族

月	開拓員	家族	合計
一月	100	200	300
二月	120	240	360
三月	150	300	450
四月	180	360	540
五月	220	440	660
六月	280	560	840
七月	350	700	1050
八月	420	840	1260
九月	500	1000	1500
十月	580	1160	1740
十一月	650	1300	1950
合計	3900	7800	11700

## 今も生き続ける永田稠の理念

永田 翼

一九一四年に日本力行会の二代目会長となった永田稠は信濃海外協会の創設に加わり、機関誌『海の外』であるべき移住を主張した。自身が米国移民を経験し、ブラジル、満洲に移住地を作り、また移民を送り出した永田の思想は、未だに生きている。

## 珈琲より人をつくれ

日本からの移民を排斥する米国に代わる移住地を探して中南米を一巡した永田は、一九二〇年、ブラジルと出会った。移住は出稼ぎではうまく行かない。理想をもって新天地を開拓し、時間をかけてその地に溶け込み永住する自立移民であるべきだ。一九二四年、信濃海外協会は、サンパウロ州の奥地にアリアンサ移住地となる土地を購入した。分譲された土地は、購買力のある農家の次三男、武者小路実篤の「新しき村」に触発された知識人、そして一九二三年の関東大地震を契機に新天地を求めていた人びとなどに、飛ぶように売れた。

アリアンサの入植者たちは、銀ブラ移民と揶揄されるほど、それまでの移民と違っていた。永田は彼らに「珈琲より人をつくれ」という言葉を与えた。コーヒーを栽培して経済的な繁栄を求めると、有意な人材を育てる方が大切だと説いたのだ。この言葉は、日系社会で最高の標語となった。そして百周年を迎えるアリアンサは、今でも有為の人材を輩出し続けている。

## 剣でとつたものは剣でとり返される

満洲国を建設した陸軍は、永田に日本からの農業移住は可能かと問うた。「可能だ。ただし剣でとつたものは剣でとり返される。鎌で開かなければならない」と答えたという。平和的移住も検討されたものの、一九三二年、関東軍は第一時武装移民を入植させた。しかし移住を知らない軍人たちの机上の計画は破綻した。陸軍は再び永田に移住専門家としての調査、報告を求めた。

「先住者の強制退去、準備不足のままでの入植は、世界各国の移住計画にその例を見ない暴挙だ。先住者を排除しなければ、移住地の建設はできないのか」と、永田は強烈な批判をした。張作霖爆殺事件で現場を指揮した東宮鉄男大佐は「匪賊討伐をしながらの移住で、万端の準備など不可能だ。ブラジルと条件は異なる。帝国百年の移民国策の利胆にあたり、新日本建設前衛の移民地に文句をつける輩は国賊と言うべきだ」と糾弾し、永田は関東軍から追い出された。そして関東軍は「満洲農業移民百万戸移住計画」を推し進めた。それでも東宮大佐の戦死後、新京市に力行村の建設が許可された。この新京力行村は小規模ではあったがモデル農園となり、栽培指導などを通じ近隣の中国人たちと交流した。それは、永田の考える移住だった。敗戦とともに襲撃される日本人集団地が多かったにもかかわらず、力行村は中国人たちに守られた。中国人村長は「力行村を襲撃する者は子々孫々まで同胞と思わない」と張り紙をしたという。

## 共生の大地アリアンサと『海の外』

木村 快

戦前戦後を通じて日本人のブラジル移民は三五万人以上と言われ、一九九〇年代には日系人は二〇〇万人以上と言われていた。かつての日本人移住地は、日系人の流出と入れ替わりにブラジル人の流入が進み、ブラジル人中心の都市へと変貌していった。そのような状況で、今日でも日系移住地のたたずまいを残しているのがアリアンサ移住地である。

アリアンサは輪湖俊午郎（ジャーナリスト）、永田稠（日本力行会会長）、信濃海外協会による移住地建設運動の中で建設された。当時の国策移民が、出稼ぎ移民を送り出すだけで、送り込んだあとの生活は移民自身の責任としていたことへの批判から、移住者自身による自治経営をおこなう、ブラジル唯一の協同組合移住地となった。しかし、ブラジルにおける排日運動、国策移民との対立の中におかれ、一九三八年には経営権を失ってしまう。

今回復刻される信濃海外協会機関誌『海の外』には、時代に翻弄されるブラジル移民の様子だけではなく、ブラジルへの移民が困難になったのちに推進される満洲への移民の様子も詳細に記されている。

今や世界は国の違いを超えて、人間の暮らしを地球規模で考えなければならぬ時代である。各国からの移住者によって構成されるブラジルでは、かつてのような多数派文化への同化を迫る政策を捨て、各移民の文化を尊重する文化的多元主義の道を志向しようとしている。そのとき、日本から移住した人々の文化がどのような一角をなすのか。これは日系人の問題ではなく、これからの日本が背負わなければならない課題であるような気がする。そのようなことを考える基礎として『復刻版海の外』が活用されることを願う。

(きむら・かい)

NPO現代座代表)



▲ブラジル開拓地農園の風景（「日本力行会所蔵幻灯画像史料」）

※本稿は、本復刻版の刊行に際し、ブラジル在住の永田翼氏（永田稠のご令孫）にご寄稿いただいたものです。

(ながた・たすく)

推薦文

海の外へのいざない

和田 敦彦

海外へと移民していった人びとは、どのような情報をもとにしたのだろうか。移民地の情報や移民の仕方、あるいは将来的な見通しを、何をもとに判断したのだろうか。移民について伝えるメディアや教育の役割に関心をもって調べていた折、信濃海外協会の雑誌『海の外』は多くの示唆を与えてくれた。こうした移民情報を長野県内に向けて詳細に送り出すとともに、海外に移住した県民からの通信が豊富に掲載されていたためである。信濃海外協会は県内、海外に支部をつくり、雑誌を通して活発な情報のやりとりをしていた。ただ、この雑誌の所蔵はごく限られていたため、なかなかその全体を調べることができなかった。

一九二二年の信濃海外協会の成立には、当時民間で移民教育を展開していた日本力行会や、長野県の信濃教育会が大きく関わる。当時の移民を仲立ちする多様な組織、すなわち移民会社や各県の海外協会、海外移住組合、やがて設置される拓務省などの関係がうかがえるのも興味深い。信濃海外協会は、大正末にはブラジルで大規模な移住地を購入し、県民による集団移民を呼びかけていく。この移住地の購入や、契約、移民の県内での応募活動がリアルタイムで追えることにも驚いた。地域の移民情報に対する関心は、国境を越えたグローバルな問題意識や発見にも結びついていく。そうした可能性をもった雑誌として、移民史研究のみならず、歴史、教育、地理、経済など諸領域の研究に有効な資料として推薦したい。

(わだ・あつひこ 早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

『海の外』がつなぐブラジルと満洲

名村 優子

信濃海外協会は全国七番目の海外協会として一九二二年一月に設置された。機関誌『海の外』には、在外長野県人からの通信や、世界各地の移住民の事情や産業に関する報告、移住民奨励に関する施策や講演会の案内などが掲載されている。海外移住民を奨励するこのような活動は他府県の海外協会でも行われていたが、信濃海外協会の特筆すべき活動として、ブラジルでの日本人移住地建設事業があげられる。

一九二四年一〇月、協会幹事の永田稔がブラジルに派遣され、当時の開拓

内容見本



海外近信

一、セー、ド、ワッソウ(二名)
イタコ 志記
私、信濃海外協会に加入し、毎月発行の『海の外』を拝見する。この雑誌は、海外移住民の生活や、海外の事情を詳しく伝える貴重な情報源である。特に、ブラジルの移住地に関する情報は、私にとって大変興味深い。海外移住の準備や、現地での生活の様子を知ることができ、今後の移住計画に大いに役立つ。また、海外からの通信も、故郷の事情を知る上で大変重要である。この雑誌を通じて、海外移住民の生活や、海外の事情を詳しく伝える貴重な情報源である。

二、一農年を過して
三、一農年を過して
四、海濱に於ける余作
五、播磨野尻の現況
六、アニーマ(耕地)より

一、一農年を過して
二、一農年を過して
三、一農年を過して
四、海濱に於ける余作
五、播磨野尻の現況
六、アニーマ(耕地)より

一、一農年を過して
二、一農年を過して
三、一農年を過して
四、海濱に於ける余作
五、播磨野尻の現況
六、アニーマ(耕地)より

(2)

海外発展問題雑考

幹事 永田 稔

△過剰な人口は日本唯一の富源
人口問題がやかましく議論される様になりました。他人の議論は暫らく措き、私は日本の過剰人口は日本唯一の富源だとおもいます。日本は農業国だといふが、米作でも著述でも富源として立派なものであります。米作でも著述でも富源として立派なものであります。米作でも著述でも富源として立派なものであります。米作でも著述でも富源として立派なものであります。米作でも著述でも富源として立派なものであります。

▲『海の外』第53号、1926年10月
日本国内の過剰人口問題の解決策を海外移住に見出している。

▲四面付見本。本複製版を45%に縮小して掲載(『海の外』第7号、1922年10月)。
ブラジルや満洲のみならず、世界各地からの通信が掲載されている。1920年代はアメリカでの排日運動を話題にするものが多い。



二九年には満洲への移民が検討されるようになった。一九三二年の信濃海外協会十周年記念では「満洲愛国信濃村建設趣旨」をかかげ、永田稠が理想とした民間団体から、政治色の強い団体に変貌していった。

一九四一年にアジア太平洋戦争がはじまると、信濃海外協会は翌年改組され、一九四四年には長野県開拓協会と発展的に改称される。機関誌『海の外』は廃刊となり、あらたに『信濃開拓時報』として一九四五年五月、第一一〇号まで発行された。組織名は変わっても、会長は知事のまま、役員もほぼ同じ人で占めた。

『信濃開拓時報』第六号（一九四四年二月）には、一九四四年の県内の義勇軍を含む満洲移民者は三八九三名で、開拓事業開始以来、最大規模であったとしている。第七号（一九四五年一月）には長野県開拓協会長・大坪保雄（長野県知事）の「昭和二十年こそ決勝の年たらしむるべく我等一億総べて特攻精神を以てことに当たる……」という挨拶文を載せた。日本民族を満洲へ定着させるため、青少年義勇軍や、大日本婦人会の組織をあげて開拓花嫁を送り出すといった記事が目立つ。

長野県内でも最多の移民を送り出した飯田下伊那地域は、信濃海外協会の主事小出佐一が飯田市の助役に就任（一九四四年末）、県内で初めてつくられた下伊那開拓館に二万円もの補助がなされるなど、満洲開拓の先進的地域であった。『信濃開拓時報』は、九九八名もの青少年義勇軍を送り出した下伊那教育会（館）の中に全号まとめて残されており、旧座光寺村役場にも僅かに残されていた。この史料は終戦末期の長野県満洲移民の実態を知ることが出来る貴重な史料であり、『海の外』と併せて広く活用されることを願いたい。

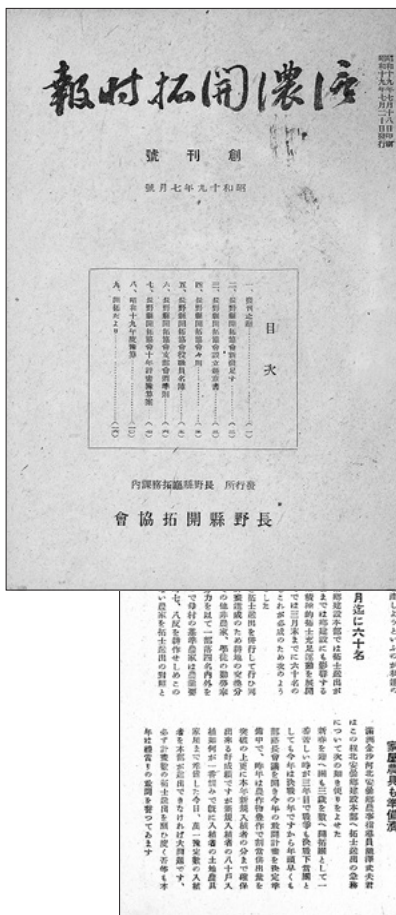
（さいとう・としえ 元飯田市歴史研究所調査研究員）



永田 稠

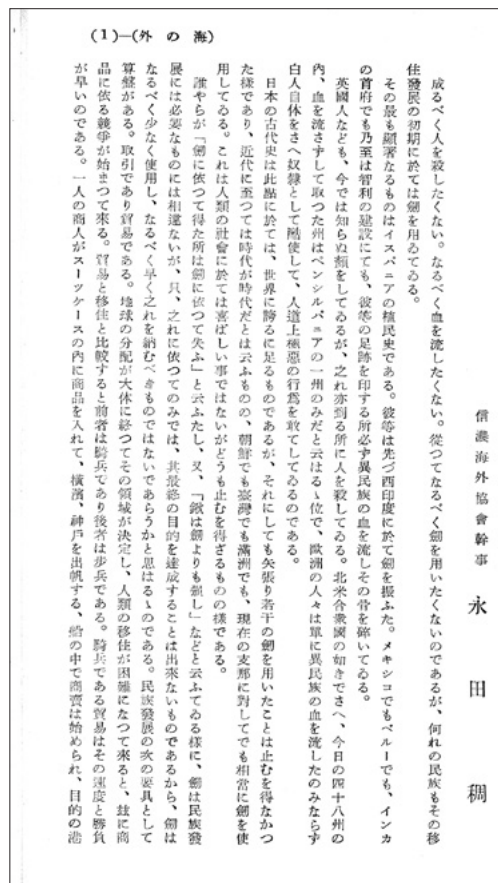
（ながた・しげし 1881～1973年）

日本力行会第2代会長、信濃海外協会幹事。『海の外』の編集人を終刊まで務めた。信濃海外協会の設立や、アリアンサ移住地の建設に大きくかかわる。クリスチャンである永田は、満洲への移民に際しても関東軍や拓務省と異なる見解をもち、旧約聖書の約束の地「カナン」への移住と日本人の移住を重ねながら、移民を推進していった。



▲上 『信濃開拓時報』第1号、1944年7月  
下 同第8号、1945年2月

終戦間際の移民促進、満洲の現地の様子を伝える貴重な資料。1945年5月まで11号の発行が確認できる。



▲『海の外』第189号、1938年1月  
永田稠は関東軍と対立し、一度追放されるものの、ブラジルでの成功を満洲でも実現しようと奔走する。

## 関連書籍

日本力行会発行  
**力行世界** 全39巻・別冊1

日本力行会は一八九七年、キリスト教徒であった島貫兵太夫が苦学生救済・海外発展の必要性を唱えるために設立された。同会機関紙『力行世界』は一九一三年より刊行され、世界各地に在住する会員の声、移民を希望している人との問答、渡航の方法案内等、移民に関する記事を豊富に掲載する。一九一三年から四五年刊行分を収録。

体裁—A5判／B5判／B4判・上製・総20、500頁  
別冊—解説(和田敦彦)・総目次・索引  
定価3,300円(分売可)  
価格—揃定価838、200円  
(揃本体762、000円+税10%)

日本移民協会発行  
**日本移民協会報告** 全2巻

大正期の移民問題の改善を主な目的として、渋沢栄一を中心に設立された「日本移民協会」(大隈重信(会頭)の機関誌。一九一四年一〇月から一九一九年六月に刊行され、米・ハワイ・南米・東南アジア・ロシア・南洋諸島等、諸地域にわたる移民の情報が提供されている。

体裁—B5判・上製・総680頁  
解説—坂口満宏・総目次・索引付き  
価格—揃定価39、600円  
(揃本体36、000円+税10%)

外務省通商局発行  
**移民地事情** 全10巻・別冊1

日本から中南米地域の移民受入地の視察報告をまとめ、一九二二年五月から三一年九月までに計二十七冊刊行された『移民地事情』。移民地の詳細な地図と写真を掲載し、受入国の実情と、移民の実態を知る貴重な資料である。

体裁—A5判・上製・総4、810頁  
別冊—解説(柳田利夫)・総目次・定価1、100円(分売可)  
価格—揃定価210、100円  
(揃本体191、000円+税10%)

南米社(星名謙一郎)発行  
**週刊南米** 全3巻

ブラジル初の邦字紙を復刻!現存を確認できる一九一八年刊行分を収録。農牧業や国際情勢等の情報だけでなく、「移民の耕地逃亡」「日本人の大泥棒」といった内容まで、資料の乏しい同時期の様子を生き生きと伝える一級資料である。  
体裁—B5判・上製・1、056頁  
収録号数—第103〜108、110〜113、116、134〜148、150号  
価格—揃定価72、600円  
(揃本体66、000円+税10%)

ブラジル日本人教育普及会  
**戦前期ブラジル移民日本語読本** 全1巻

一九三六年から翌年にかけて刊行された、ブラジル初の日本語読本教科書を復刻。ブラジルの偉人・歴史上の人物の伝記や、ブラジルの日系女生徒の作文、ポルトガル語教科書からの翻訳教材も見られ、「日本の教育」と「ブラジルの教育」の融和への志向性を垣間見ることが出来る。  
体裁—A4判(四面付)・上製・総300頁  
解題—根川幸男  
価格—定価36、300円(本体33、000円+税10%)

十五年戦争重要文献シリーズ 捕集3  
**輝号「ブラジル」「勝ち組」広報誌** 全1巻

第二次世界大戦後のブラジル日系社会では「勝ち組」「負け組」というふたつの思想的な対立が顕著となった。「勝ち組」とは日本の敗戦を信じなかった日本人移民のことで、一九四六年から四七年の時点では在伯日本人移民の八割を占めた。一方の「負け組」の人たちは、ポルトガル語の新聞を読むことができた日系社会のエリートが多かった。『輝号』は、「勝ち組」の広報誌として一九四九年三月から五年二月まで刊行され、「勝ち組」の日本回帰運動の心理に迫る資料である。

収録内容 創刊号(昭和二四年三月) 全頁・各号「目次」  
【編輯後記】  
体裁—B5判・上製・総180頁  
解説—岸和田仁  
価格—定価20、900円(本体19、000円+税10%)

満洲移民関係資料集成第II期  
満洲移住協会編  
**拓け満蒙・新満洲・開拓** 全23巻・別冊1

政府による大量移民方針を推進する役割を果たし、一九三六年から四五年まで刊行された『拓け満蒙』とその継続誌『新満洲』『開拓』。時局の進展に伴う満洲移民の意義と実態の変化を知ることのできる一級資料である。

体裁—B5判／A5判・上製・総11、864頁  
別冊—解説(岡部牧夫)・解題(小林弘二)・総目次  
定価2、200円(分売可)  
価格—揃定価556、600円  
(揃本体506、000円+税10%)

**満洲開拓関係雑誌集成** 全11巻・別冊1

「満洲国」で移民政策を推進した満洲拓殖公社、満洲国政府開拓総局、満洲国協和会が刊行に関わった『偕拓』、『開拓月報』、『開拓協和』といった、一九三七年以降の「満洲開拓」の実態を浮かび上がらせるための一級資料を復刻・集成。

体裁—A5判／B5判・上製・総約5、800頁  
別冊—解題(風間秀人)・総目次  
定価1、650円(分売可)  
価格—揃定価242、000円  
(揃本体220、000円+税10%)

**満蒙開拓青少年義勇軍関係資料** 全7巻

一九三八年より開始された「満蒙開拓青少年義勇軍」の制度と実態についての資料を収集し編集。義勇軍の創設、募集、送別の過程から実態、教育の果たした「成果」までを網羅。満洲移民研究に必須の資料!

編・解題—白取道博  
体裁—B5判・上製・総2、980頁  
価格—揃定価154、000円  
(揃本体140、000円+税10%)

復刻版

# 海の外

全3回配本  
全7巻・別巻1

編集 森武麿  
(一橋大学名誉教授)

揃定価 235,950 円  
(揃本体 214,500 円 + 税10%)

A4判／四面付／上製／総約2,250頁（原誌約9,000頁）

推薦：和田敦彦、名村優子、齊藤俊江

刊行によせて：永田翼、木村快

底本：『海の外』第1号～第254号（1922年4月～1943年6月）

※第47, 48, 50, 51, 54, 57, 59, 157～179, 192～196, 198～203, 216～231号が欠号

『信濃開拓時報』創刊号～第11号（1944年7月～1945年5月）

原本提供：長野県立歴史館、日本力行会、下伊那教育会、飯田市歴史研究所、  
佐久穂町図書館、北海道大学



▲『海の外』第1号、1922年4月、表紙

配本	巻数	収録内容	揃定価	刊行予定	ISBN 978-4-8350-
第1回	第1巻	『海の外』第1号～第27号 大正11年4月～大正13年7月	66,000円 (揃本体60,000円 + 税10%)	2024年10月	8834-1
	第2巻	『海の外』第28号～第53号 大正13年8月～大正15年10月			
第2回	第3巻	『海の外』第55号～第78号 昭和元年12月～昭和3年12月	70,950円 (揃本体64,500円 + 税10%)	2025年2月	8837-2
	第4巻	『海の外』第79号～第102号 昭和4年1月～昭和5年12月			
	別巻	森武麿『満洲移民とブラジル移民—信濃海外協会「海の外」を対象として—附「海の外」総目次・索引』			
第3回	第5巻	『海の外』第103号～第126号 昭和6年1月～昭和7年12月	99,000円 (揃本体90,000円 + 税10%)	2025年6月	8840-2
	第6巻	『海の外』第127号～第152号 昭和8年1月～昭和9年12月			
	第7巻	『海の外』第153号～第254号 昭和10年1月～昭和18年6月 『信濃開拓時報』第1号～第11号 昭和19年7月～昭和20年5月			

## 満洲移民とブラジル移民

—信濃海外協会『海の外』を対象として—附『海の外』総目次・索引

森武麿 著

A5判／上製／総約400頁、附「海の外」総目次・索引

定価4,950円（本体4,500円 + 税10%）※分売可

2025年2月、第2回配本時に同時刊行

ISBN：978-4-8350-8844-0

悲惨な経験が語り継がれる満洲国への移民政策。だがその前史として今日200万人超という、最大の日系人社会を築いているブラジルへの移民があったことへの関心は薄い。農村経済史研究の泰斗が、『海の外』『信濃開拓時報』の特徴や今日的な意義を明らかにしながら、なぜ長野県の移民送出は盛んでありつづけたのか、その経済的・社会的・政治的背景を解明した、移民研究の必読書！『海の外』『信濃開拓時報』の総目次・索引を附して刊行するものである。

振替 東京都会区水道2-10-10  
F A L 003359811677004  
T E X 00159811677004  
1120005  
不二出版

表示価格はすべて税込